



第1図 「工藤氏家屋図」
(長井市提供、所蔵者：工藤誠一郎氏)

〈特別寄稿〉

伊達家臣片倉氏をめぐって

山形県地域史研究協議会 会長

伊藤清郎

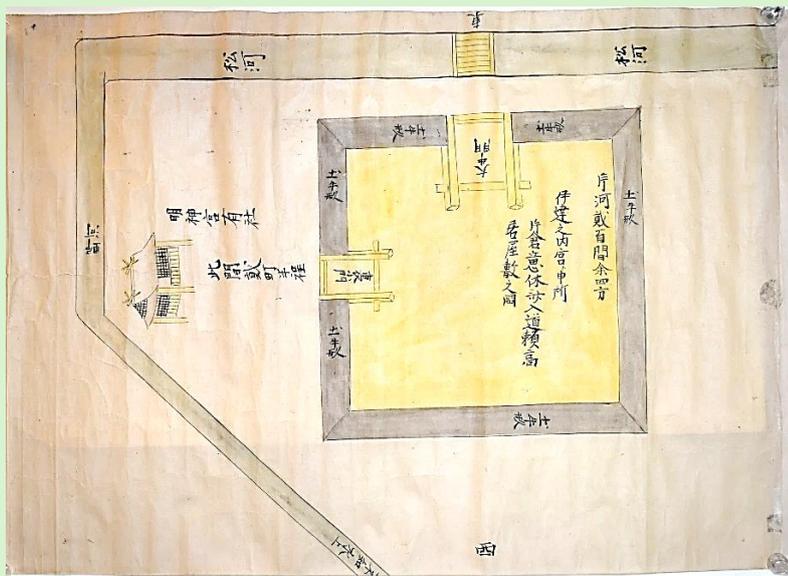
一 はじめに

『長井市史（平成版）』通史編四卷（二〇一九～二〇二四）・各論編二卷（二〇二〇～二〇二二）刊行後、二〇一九年に中世分野において幾つかの貴重な市史資料が確認されました。そのうちここでは、伊達家臣片倉氏に関する史資料の紹介と若干の考察を行います。

伊達氏が置賜地域を支配していた時代に、現在の長井市宮村一帯は片倉かたくら老岐守景親（意休齋）が領していました。その後、天正十九年（一五九一）伊達氏が岩出沢（現在の宮城県大崎市岩出山）へ移封されると、片倉一族も共に移っていきました。近年になり、宮城県登米市石越の片倉家に片倉氏関連文書が多数伝来していることが判明しました。これは二〇二二年六月、インターネットで宮城での史料保全活動について知った石越片倉家の関係者から依頼を受けた東北大学災害科学国際研究所の佐藤大介氏が、同家所蔵の古文書保

全活動を行い文書を調べていたところ発見したもので、そのなかに宮村館（長井市）と見られる絵図も含まれていました。

『米沢市史第一巻 原始古代中世編』（一九九七）第四章第二節・第三節の安部俊治氏や『長井



第2図 「宮村館図」（片倉家文書）

（写真撮影者：東北大学災害科学国際研究所
佐藤大介氏）

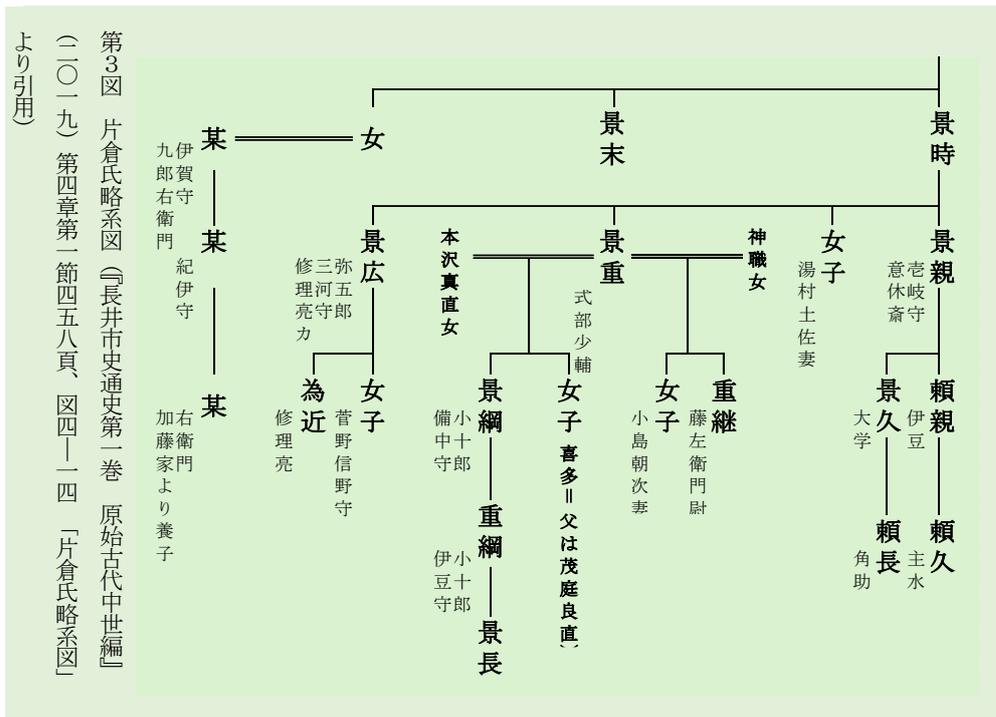
市史通史第一巻 原始古代中世編』（二〇一九）第四章の菅野正道氏、それに同五章の伊藤清郎の著述、さらに二〇一三年一月一二日に行われた「長井市史歴史講座」における菅野正道氏の発表「伊達氏家臣片倉氏の出自と動向」に付け加えることはないとは思われますが、『白石市文化財調査報告書第四七集 片倉小十郎景綱関係文書』（白石市教育委員会、二〇一三）と、今回発見された「宮城県登米市石越片倉家文書（宮村館絵図）」を手がかりに片倉氏について若干の考察を加えてみます（仙台市青葉山にある東北大学災害科学国際研究所へ一緒に調査に行った長井市史編纂室の方々に御礼申し上げます）。

二 石越片倉家文書の「絵図」

前述のように宮村館に関して、登米市石越の片倉家文書のなかに関連する絵図が見つかりました（第2図「宮村館図」参照）。絵図には四方を「土手」で囲まれ、東に「大手門」、北に「裏小門」（いずれも冠木門）が記され、土塁の内側に「片河貳百間余四方」「伊達之内宮ト申所 片倉意休齋入道頼高居屋敷之間」とあります。また北側「裏小門」の外側に「明神宮有社」「此間貳町半程」と記され掘立柱、入母屋造り、千木・鯉木、高床、格子戸からなる神社（明神宮）が描かれています。二町半というと二七三メートルくらいですので（一町一〇九メートルとすると）総宮神社

付近となります（遍照寺が描かれていないのは不思議ですが、岩出山・仙台へと移転していったので元の寺については記載しなかったか）。

「意休齋」は小十郎景綱の伯父にあたる人物ですが（第3図「片倉氏略系図」参照）、彼の居館の「土手」二〇〇間四方を一間一・八メートルとすると約三六〇メートル四方となります（片河は片側力）。主郭を囲む外郭の範囲と一致します。「松河」と「野河」が外堀の役割を果たすとイメージした描き方です。縄張略図（前掲『長井市史通史第一巻 原始古代中世編』第五章第一節五〇二・三頁、図五・五・六）では「裏小門」付近が張り出しており、外枳形の構造が想定されます。絵図では東側に「大手門」が設けられていて松川（最上川）の舟運を意識した配置なのでしょう（松川に木橋が描かれています。江戸時代を通じて松川（現在の最上川）に橋がかけられていた事実はない）。縄張略図から見ると内郭の虎口は南側に設置されていたと考えるのがよいかもしれません。さらに「片倉代々記」（仙台市博物館所蔵片倉家資料）にある「南の大手」という表現から、外郭の大手も南側に開かれていたのではないかと（絵図の「大手門」は東門ということでしょう）とも考えられます。現地調査によって、南側はこれまででの縄張図よりはもっと南側に土塁・堀が存在することを想定しています（現在、摂取院（真言宗）。境内の中に高まりが見え、これが土塁の



残存かと思われる。この南大手門を防衛するために外枳形か馬出(角馬出、丸馬出)が設置されていてもよいかもしれません。

前掲『米沢市史第一巻 原始古代中世編』第四章第二節五七八頁、図二五五及び五八七頁、図

二五〇、計四一七名、四番目が原田十郎で馬上四一騎・鉄砲八・弓一〇五・鎧二四三、計三九七名で、いずれも多数の兵を動員できる有力家臣でした。

次に彼らの居館の規模を見てみると(伊達領内

二五七に見る主家伊達氏の米沢城と城下町推定図に表された構造が、伊達家有力家臣の片倉家に「記憶」として「継承」され、江戸期に「宮村館」を描く際にその「記憶」が大きく影響したとも考えられます。

三 片倉館

天正二年(一五七四)頃に作成された置賜地方の伊達氏家臣の動員兵力を記した「着到帳」が残されています(「伊達家文書」、表1「置賜に居住する主要な伊達氏家臣の軍勢」参照)。馬上騎数の順に見ると、片倉老岐・新田殿・小梁川殿・湯目半内・原田十郎・下飯坂源兵衛殿・大津将監・遠藤四郎左衛門と続き、動員の総数では、新田殿(左衛門義綱)が馬上五二騎・鉄砲一四・弓一三五・鎧四〇二、計六〇三名で最大、二番目は湯目半内で馬上四四騎・鉄砲二二・弓一三二・鎧四一〇、計五九七名、三番目が片倉老岐で馬上七二騎・鉄砲二三・弓七二・鎧

	馬上	鉄砲	弓	鎧	野隊	合計	居城など
栗野十郎左衛門尉	18	10	0	190	20	18騎+220	北条庄・二色根城(南陽市)
大津将監	28	12	0	205	36	28騎+253	北条庄・宮内館(南陽市)
高成田大学	7	5	41	51	0	7騎+97	上長井庄・尾長島(川西町)
原田十郎	41	8	105	243	0	41騎+356	上長井庄・原田城(川西町)
小築川殿	50	12	190	20	0	50騎+252	屋代庄・高島城(高島町)
片倉老岐	72	23	72	250	0	72騎+345	下長井庄・小桜城(長井市)
下飯坂源兵衛殿	34	10	67	191	0	34騎+268	屋代庄・亀岡館(高島町)
湯目半内	44	21	122	410	0	44騎+553	下長井庄・洲島館(川西町)
鬼庭又二郎	12	6	86	12	0	12騎+104	上長井庄・川井館(米沢市)
鮎貝殿	17	11	25	94	0	17騎+130	下長井庄・鮎貝城(白鷹町)
遠藤四郎左衛門	22	15	0	213	0	22騎+228	下長井庄・手ノ子(飯豊町)
国分六郎殿	14	9	42	140	0	14騎+191	下長井庄・菽生城(飯豊町)
新田殿	52	14	135	402	0	52騎+551	上長井・館山城(米沢市)
浜田大和	14	0	52	83	0	14騎+135	屋代庄・一本柳館(高島町)
遠藤内匠	1	6	30	213	0	1騎+249	伊達輝宗の側近
片倉藤右衛門尉	1	0	8	35	0	1騎+43	片倉景綱の兄?

表1 「置賜に居住する主要な伊達氏家臣の軍勢」『長井市史通史第一巻 原始古代中世編』第四章第一節四五七頁の図四一三、「置賜に居住する主要な伊達氏家臣の軍勢(天正二年頃の着到帳より)」引用

の中世城郭については、『山形県中世城館遺跡調査報告書 第一集』(山形県教育委員会、一九九五)参照)、新田氏は伊達氏の会津口防衛の要を

領していて、米沢館山城が拠点となります。現在見る館山城・館山平城は伊達輝宗が隠居した以降の姿であり、新田氏時代のそれではないですが、大規模な境目の城であったことは間違いないでしょう。湯目半内の居城は洲島館(川西町洲島)で東西一二〇メートル・南北一五〇メートルの規模です。原田十郎の居城は原田城(川西町上小松)で東西二五〇メートル・南北三〇〇メートルの規模です。

次に片倉氏の居館である宮村館について見てみると、野川の微高地に築かれた東西南北約一六〇メートルと堀をとまなう方形館。戦国期にさらに外側に堀と土塁を築き、二重の土塁・堀で防備する構造となります。主郭の内部は土塁の残部が見え、複雑な構造だったでしょう。副郭(二の丸)の北側には張り出した土塁が残ります。南側はこれまでの縄張図よりはもつと南側に土塁堀が位置していたと思われます。摂取院(真言宗)境内の中に高まりが見え、これが土塁の残存かと思われ、片倉家臣という家伝をもつ工藤家の屋敷地から続いているようです。永正六年(一五〇九)八月一日国分胤重軍勢催促廻文写『奥羽編年史料』所収文書、一九六三、市立米沢図書館所蔵)に、伊達尚宗が越後上杉定実を助けるために下長井衆に出兵を督促した中に、「宮村殿鮎貝殿らが一〇〇から二五〇人の「武頭」として「出張」することを命じた記事が見えます。天文の乱では

片倉氏は晴宗方に属し、「晴宗公采地下賜録」『米沢市史資料編一古代中世史料』、一九八五)に片倉伊賀守が上長井小菅・下長井奥田内の在家等が安堵されています。天文二年(一五五三)には宮村館に片倉家物領筋の老岐守景親が入ったとされ、高野町の「本家高野」と呼ばれる工藤家に伝存する由緒書『家系申伝書』には、宮村片倉館に本丸・二の丸・大手先があつたことが記されています(高井耕次「古文書から見る戦国期の長井―旧家に伝わる由緒書を中心に―」(二〇一七年六月一日開催「長井市史歴史講座」発表を参照)。

江戸時代に白石城主片倉家がまとめた家史である「片倉代々記」の天正一七年六月五日条に「村上大学、工藤勘解由(かかげゆ)由(ゆ)西(せい)人(にん)共に約しき場に於て働き討死す、右工藤勘解由ハ宮村より来て供を務、其子孫工藤孫左衛門ハ于今長井庄宮村片倉館南の大手に居住すと云々」とあり、現在の工藤家のあるところが「片倉(宮村)館南の大手」ということとなります(前掲『白石市文化財調査報告書第四七集 片倉小十郎景綱関係文書』一一頁・『市史編纂室だより』No.二二二、二〇一七・『長井市埋蔵文化財調査報告書 第二八集』、二〇〇八)。

ところで明治期に作成された「工藤氏家屋図」を見ると(第1図「工藤氏家屋図」参照)、石塁(石垣)で囲まれ、虎口の所は二重の水堀があり食違が見えます。中世から継続する構造なのか

どうかは確認できませんが、虎口がしっかりとあります。南大手門から外側に出た西側の位置に当たるので、出丸の存在も考えられます。

いずれにしても宮村館は二重の輪郭式方形城郭で、かつ強固な防御施設も備えた戦国期の城郭であり、置賜地域の伊達家臣の居城の中でも上位に位置する大規模な城郭であることは間違いありません。

四 おわりに

「宮城県登米市石越片倉家文書」は、所蔵者の片倉景胤様のご意向で、仙台市博物館に寄贈されました。寄贈されるにあたり、東北大学災害科学国際研究所の佐藤大介氏のご奮闘があり、これで同文書が広く利用・研究に供されることとなりました。

絵図を掲載して解説し、若干考察を行いました。長井市の歴史にとつては言うまでもなく、伊達氏研究にとつても非常に重要であり、価値が高いものであることを確認できました。それと同時に「貴重な史料はまだ地域の中に眠っている」ということを実感することとなりました。(小稿は、二〇二四年三月二日小桜館で行われた二〇二三年度第三回「長井市史歴史講座」において「長井市域の中世城郭」と題して講話した内容から抜粋し、加筆・修正したものです。)

米沢城御三階を撮影した外国人

市立米沢図書館 郷土資料専門員

青木 昭博



写真1 「米沢城御三階」(市立米沢図書館所蔵)

一 はじめに

上の写真1は、明治五年(一八七二)に撮影された米沢城御三階の写真としてよく知られており、米沢城を紹介する書籍に利用されてきました。元の写真の所在は現時点では確認されていませんが、市立米沢図書館では大判(縦四四センチメートル×横五五センチメートル)に拡大印刷されたものを所蔵しており、各地からの掲載依頼に対しこの写真を提供しています。

この写真を撮影した人物は、これまでイギリス人のバビール兄弟と紹介されてきており、図書館には左の写真2「英人バビール兄弟」(K289/エ)という写真も現存します(こちらは一〇・二センチメートル×七・二センチメートル)。



写真2 「英人バビール兄弟」
(市立米沢図書館所蔵)

では、この兄弟が何の目的で米沢を訪問し、写真撮影したのかを改めて調査すると、これまでとは異なる事実が見えてきたので紹介します。

二 藤倉富蔵氏に送られたアルバム

米沢城御三階の写真を詳しく紹介した記録に、大乗寺良一著『郷土遺聞 鶴城史講』という昭和二十九年(一九五四)刊行の著作があり、その中の十二番目の項目「米沢城御三階とバビール兄弟」では、次のことが紹介されています。

・明治五年、横浜商館七十六番の英国人バビール兄弟が、東北蚕業視察のため米沢地方を訪ねた。
・兄弟は東町の商人・藤倉富蔵宅に滞在し、置賜県庁や学館(藩校興讓館)を見学した。

・その後、長井町(当時はまた宮村と小出村)を視察し、会津若松経由で横浜に戻った。

・横浜帰着後、藤倉富蔵方にお礼としてシャンペン酒と旅行中の写真五十枚余りが貼られたアルバムが送られてきた

・アルバムは昭和八年(一九三三)に上杉神社宮司の大乗寺氏に贈与され、新聞記者某氏が御三階の写真を引き伸ばし頒布した。

図書館が所蔵する大判の写真は、この新聞記者某氏が頒布したものと思われる。そしてアルバムには兄弟の写真も貼ってあったものと思われる(アルバムは、上杉神社に問い合わせたところ、現在は確認できないとの回答でした)。

三 バビール(バヴィエル)はスイスの生糸商人

大乗寺氏の情報を基に、インターネットを利用して調査を行いました。まず、バビールや横浜商

館七十六番地で検索すると、横浜開港資料館の館報『開港のひろば』第九〇号(二〇〇五)が確認されました。「バヴィエル商会」の項には、明治一九年(一八八六)刊行の『日本絵入商人録』に掲載された「横浜七十六番地バビエル商会内面の図」という生糸を集荷した図が紹介されています。『日本絵入商人録』を見てみると主人のバヴ



第1図 「横浜七十六番地バビエル商会内面の図」
(藤本実也『開港と生糸貿易』1939)より

イエルはスイス人と紹介され、さらに「横浜のスイス系商社」の項には、文久三年(一八六三)に來日したスイスの特派使節団の写真が掲載され、その右端の人物にはエドゥアール・バヴィエルの名が確認されました。残念ながら写真は不鮮明で、

エドゥアール・バヴィエルの顔と、当館の英人バビール兄弟の顔との比較はできませんでした。

また、インターネット検索では、明治七年(一八七四)に出版されたバヴィエル著『日本の養蚕、絹および蚕種の商取引、絹産業』(以下、『日本の養蚕』)という洋書も確認されました。平成二十六年(二〇一四)に神奈川県立歴史博物館で開催された特別展「明治大学 クリスチャン・ポラックコレクション 繭と鋼の出品目録の中の一冊でした。

すぐに横浜や明治大学に行き確認したいところでしたが、当時はまだ新型コロナウイルスが大流行中で調査は不可能であったため、感染状況がやや終息に向かった頃、横浜開港資料館に向いて、バヴィエルに関して調べを開始しました。

四 米沢を視察したのはバヴィエル商会の主人エドゥアール・バヴィエルではなかった

横浜開港資料館で最初に見たかったのはスイスの特派使節団の写真でした。『開港のひろば』の出典には、中西道子氏の論文「スイス特派使節団の来浜と商館の創業」とあり、その論文を見せたいと、写真の出典は「A HIDEOREDO YEARS IN THE SERVICE OF TRADE」という英文の論文でした。横浜開港資料館の職員に手伝ってもらいながらアルファベットでの検索を行い、その英文の論文を見ると使節団の写真が載っていました。

た。集合写真なので個々の人物は小さいですが、カイゼル髭の顔は、米沢のバビール兄弟の写真とは異なった人物に見えました。

次にバヴィエル著『日本の養蚕』を探しました。「Bavlar」等で検索すると、該当する洋書が見つかり閲覧させていただくと、古い洋書の見返しに「ERST VON BAYER」の著者名が確認されました。バヴィエル商会の主人・エドゥアール・バヴィエルとは違うバヴィエルさんに戸惑いました。

その後、横浜開港資料館の学芸員に紹介された武内博編著『来日西洋人名事典』(一九八三)の「バビエ」(ママ)の項目を見ると、バビエは一八四三年にスイスのクールで生まれ、一八六三年にスイスの使節団の一員として来日、一八六四年に横浜居留地七十六番地にバビエ商会を設立、生糸の輸出を始め成功を収めています。一八九二年に次男のジャンに任せ帰国し、一八九六年には日本政府から勲二等瑞宝章を受章、一九二六年にスイスのチューリヒで死去したことなどの詳しい記載があり、その参考文献に藤本実也著『開港と生糸貿易』(一九二九)の記載が見えました。

横浜開港資料館の開架で『開港と生糸貿易』を探し閲覧すると、その中巻に「バヴィエー商会」(ママ)の大変詳しい記載がありました。第一に、主人のエドゥアール・バヴィエーの肖像写真が確認されました。立派なカイゼル髭をたくわえた顔は、米沢に残るバビール兄弟の写真に写る外国人



写真3 エドゥアール・パヴィエーの肖像写真(藤本実也『開港と生糸貿易』(1939)より)

二人とは明らかに異なるものでした。また、注目すべき記載が見つかりました。明治十四年(一八八二)頃のバヴィエー商会の顔ぶれとして七名の氏名が記載されて、その最初の三名の名は次のように記されています。

Ed. de Bavier (エド)
Ant. de Bavier (アント)
Ernest. de Bavier (エルンスト)

なんと、明治十四年のバヴィエー商会には、三人のバヴィエーがいたことになりました。

この度の調査では、これ以上の資料は確認できませんでしたが、想像をたくましくすると、米沢を訪ねたバヴィエー商会の外国人は、エルンスト・バヴィエーであった可能性も考えられます。彼の著作『日本の養蚕』には日本全国の養蚕・蚕種の地名が記されており、出羽(羽前)には庄内・

山形・上山・米沢の地名が記されています。日本各地を巡り、『日本の養蚕』を纏めたのではないのでしょうか。

五 良質の蚕種を求めに置賜地方を訪ねた外国人達

明治五年にスイス人系のバヴィエール商会の外国人が、米沢地方を視察した背景には、幕末から明治初年にかけてヨーロッパで微粒子病が蔓延し、健全な蚕種を求めるため、外国人が日本各地の蚕種の産地を調査、あるいは商品取引を行ったことがあります。養蚕が盛んであった置賜には、バヴィエール商会以前にも外国人が調査等に訪れ、報告書を残しています。

明治三年(一八七〇)五月には、新潟のイギリス代理領事・アルトジェームス・トゥループ等一行五名の外国人が、新潟から会津若松を経て置賜地方を視察し、小国を経て六月初旬に新潟へ戻っています。同行した四人の氏名と出身は次のとおりです。

- ・アルトウール・リヒャルト・ウエーバー 新潟居留のドイツ貿易商人
 - ・メース 新潟のオランダ副領事
 - ・ギューチョウ 横浜居留のドイツ人商人
 - ・ジャクモ 横浜居留のイギリス人
- 新潟代表のトゥループ代理領事は、東京のイギリス領事パークス宛てに、報告書を提出していま

す。この報告書については、米沢女子短期大学の東海林静男氏が「新潟駐在イギリス代理領事による新潟港後背地への産物調査旅行について」『東北の地域史と民衆』(一九九三)として紹介しています。また、青柳正俊著『明治三年 欧州視察団周遊記 新潟から会津・米沢の旅』(二〇二〇)では、トゥループの報告書に加え、ドイツの貿易商人ウエーバーがドイツの新聞に連載した旅行記も併せて紹介しています。外国人が見た当時の米沢や置賜の様子がうかがえる文献です。また、田尻村(現白鷹町横田尻)の丸川家には、明治五年にイタリア人のデロロー(ママ)が蚕種製造を視察し、蚕種の売買契約をし、その年は七千枚余りの蚕種を送っています(『山形県史 本篇6』一九七五)。

イタリア人のデロローは、横浜居留地九十一番のデロロー商会の主人、イシドロ・デロローと考えられます。デロローはイタリア・ミラノの出身で、慶応二年(一八六六)に来日、日本の養蚕法に関する小冊子を出版、明治四年(一八七二)にも『養蚕と絹』日本におけるそとしてヨーロッパにおける』を出版しています(秦 哲子「百草園にある二つの句碑から」青木角蔵・三堀武蔵とデロロー商会」『日野市ふるさと文化財課紀要 第一号』二〇一三)。

資料紹介 県史資料室所蔵

『山形の歴史』 前篇・後篇

著 川崎浩良（郷土史家）

一 はじめに

『山形の歴史』は昭和二十三年（一九四八）十二月三十一日に出羽文化同交会が発行（非売品）したものです。本書はA5版で、頁数は前篇三七八頁、後篇五一〇頁で諸所に図版が入っています。昭和三十八年（一九六三）に、川崎浩良全集刊行会から復刻本が出版されています。

二 発刊の経緯

本書の「自序」に発刊の経緯が記してあり、それによると、昭和七年（一九三二）、当時の山形市長高橋勝兵衛は、山形市史の編さん事業を本格的に進めるために三浦新七博士を顧問、渡邊彌太郎、渡邊徳太郎、五十嵐晴峯、安齋徹の各氏を委員に委嘱し、助役工藤貞次を事務主任、川崎浩良は連絡書記となり、昭和十一年（一九三六）には編さん主任となります。

川崎が編集・執筆を進める上で顧問であった三浦新七博士の力添えが大きかったことがわかります。三浦は「(前略)現在の山形を理解する事

に重点を置き、現代山形市民の構成、縣内若しくは村山平野に於ける本市の地位等を説明するに足る可き歴史的事情を史料の許す範囲に於て時代別に跡付くる事を以て本市史の目的とする方適當なりと信ず。(後略)」と助言しています。戦争のために編さん事業は中止になりましたが、ようやく昭和二十二年（一九四七）七月から執筆に入り、同二十三年十一月に本編を稿了しました。戦後に自費出版として発刊しましたが、出羽文化同交会の鈴木清助を始めとする会員の協力を得ており、特に武田好吉には用紙の手配、渡部磯太郎・佐藤榮太には装丁や印刷の支援を受けています。

三 本書の内容・構成

本書は前篇・後篇に分かれ、全八篇三十五章にわたり、時代順に著述しています。「阿古耶松と阿古耶姫の伝説」、「山寺文化の興隆」、「最上紅花

の産出」、「馬見ヶ崎川の水害」等、読者の関心をもたせる内容がみられます。また、本文の所々に手書きの挿絵や写真を配置するなど工夫して執筆していることも伺えます。

四 おわりに

『山形の歴史』の発刊は、まさに戦前から戦後にかけて川崎浩良の熱意と努力の成果といえます。川崎は山形県史編纂委員会委員・山形県文化財保護協会常任理事などを務め、県内様々な文化事業にご尽力されるとともに、ご自身も多くの著作を出されました。長年、山形県の歴史研究を牽引した功績が認められ、昭和三十年度の第一回齋藤茂吉文化賞を受賞、最初の受賞者となりました。



写真 『山形の歴史』前篇の表紙
初版本（県史資料室所蔵）

山形県

県史だより 第二十八号

令和八年三月二十七日発行

編集・発行

山形県総務部

高等教育政策・学事文書課分室 県史資料室

〒九九一―八五〇一

寒河江市大字西根字石川西三五五

村山総合支庁西村山地域振興局

電話 〇三三七―八三一―二二五

FAX 〇三三七―八三一―二二六